

<資料>

翻訳関連文献の集成について

長沼美香子

先ごろ刊行された『日本の翻訳論』（法政大学出版局、二〇一〇年）の巻末に、「文献案内 さらなる研究のために—日本における翻訳論への水脈」として、翻訳関連文献の集成を試みた。特に雑誌の翻訳特集に注目した直接の理由は、「エピテクスト」（翻訳テキストの外側にあるパラテクスト）としての価値に注目したからであるが、と同時に単行本よりも文献収集が相対的に困難でもあるからだ。主要なものを手作業で整理するという方法を用いたが、今後ともこの方向で作業を継続して一層の充実を図りたいと考えている。情報技術を駆使した体系的なデータ収集の方法とは程遠いのだが、個別の記事はすべて現物を確認するという方針で集めていく予定。昨今ではインターネット上での情報収集も容易であり、たとえば CiNii（国立情報学研究所論文情報ナビゲータ）で「翻訳」をキーワードとして検索すると、一六七八件（二〇一〇年十二月現在）ヒットする。このような情報源も有用であるが、また並行して別タイプの文献情報も必要なのではないかと思われる。

そこで、ウェブ版『翻訳研究への招待』に今回より「文献案内 補遺」を随時掲載する。文献の基本項目は、『日本の翻訳論』の「文献案内」にできるだけ倣うが、「誌名、巻・号、特集名、出版社、目次、編集後記など」以外にも、特筆すべき点があれば追加する。

文献案内 補遺『日本の翻訳論』以後の追加情報（1）

『図書』第三十二号、岩波書店、一九三八年九月

鷗外先生の翻訳／太田正雄　鷗外の翻訳的功績／野上豊一郎　父と翻訳物／小堀杏奴

『言語生活』第六十七号、筑摩書房、一九五七年四月

「特集 翻訳と日本語」

時間で追われる翻訳者の苦心（座談会）／中野好夫・石沢深美・吉野良造

翻訳と文体用語／高橋健二　言語表現と明治の翻訳文学／柳田泉　外国語教育が日本語に与えた影響／喜多史郎

『言語生活』第一九七号、筑摩書房、一九六八年二月

「特集 直訳・意識」

直訳・意識（座談会）／朱牟田夏雄・竹内実・グロータース・溝口歌子

翻訳における直訳と意識／森岡健二　谷崎源氏と与謝野源氏／野村精一　試験答案における直訳

と意識／梶木隆一 翻訳機械における意識の可能性／栗原俊彦 『海潮音』からマチネ・ポエチックへ—韻文詩の翻訳における直訳と意識／栗津則雄 翻訳の罪（言語時評）／野元菊雄

『文学』第五十巻第五号六号九号、岩波書店、一九八二年五月六月九月

文学研究と翻訳（上）（中）（下）—テクストロジーの立場から／中本信幸

『文学』第五十巻十二号、岩波書店、一九八二年十二月

「外国人の日本文学研究」

外国人はどのように日本文学を研究しているか（座談会）／池田重・D. キーン・福田秀一・大岡信
理論欠如と価値判断病—日本の文学史記述における「存在していない」問題点／I. 日地谷キルシュ
ネライト

番外編

翻訳を特集した誌面ではないものの、翻訳に関する論考が掲載されている学術雑誌などは多数存在する。ここでは、英文学・英語学を中心とした雑誌ごとに、翻訳関連の文献を抽出して整理しておく。

『英語文学』緑葉社、一九一八年—一九二一年

平田禿木編集で一九一八（大正七）年一月に創刊された月刊誌で、第一巻と第二巻は五号、第三巻は十一号、第四巻と第五巻は十二号を刊行。第二号第二巻（一九一八年八月）からは、生田長江が主幹、和田垣謙三・野口米次郎・平田禿木が編輯顧問。創刊時の英名は *The Lamp*、第五巻からは *The Eigobungaku* となる。文学者による評論、外国文学の対訳、日本文学の英訳の他にも、堺利彦による翻訳論やマルクスの著作（英訳）の対訳などが寄稿されている。また、第二巻第三号（一九一八年九月）より、「懸賞翻訳課題」とその講評もほぼ毎回掲載している。創刊号の「発刊の辞」全文を以下に引く。「インタアナショナル」ということばがキーワードとして何度も登場してくるのが印象的である。

「英語を通して文学を享樂し、文学を通して英語を習得すると云ふ。本誌発刊の趣意は、殆んどこの二句に尽きて居ります。

けだし、文学は本来インタアナショナルなものであり、英語は今日に於て、最もインタアナショナルの国語であります。そしてこの、最もインタアナショナルの国語を通して、本来インタアナショナルの文学を享樂し、又この、本来インタアナショナルの文学を通して、最もインタアナショナルの国語を習得すると云ふのは、決して意味の無い企ではなからうと思ふのであります。

殊に我が国にあつては、外国語と云へば先づ英語を意味するといふやうな有様で、英語は少くとも第一外国語なのであります。従つて、英米の文学が最も夙くから、最も広く行はれてゐるのは勿論のこと、欧州大陸の文学と雖、また主として其英訳を通して傳へられてゐるのであります。乃ち、単にこれ

だけの事情からでも、本誌が『英語文学』として、我が文壇と語学界との両面に跨つて、十分存在の理由を有する所以は、たしかに承認して頂けるだらうと思ひます。

加之、近頃日本文学を世界の文壇で紹介せねばならぬと云ふ、即ち、日本文学をインタアナショナルなものにしたいと云ふ要求が、外人と邦人との双方から、愈々痛切に感じられ、従つて日本文学の欧州語訳、殊に英訳が、漸く流行にならうとするの兆を呈して居ります。乃ち、本誌は其使命の一として、日本文人の手に成れる英文の創作評論等を掲載し、聊か日本文学の世界的発表に貢献することの光榮を有して居ります。

要するに本誌は、日本の新時代を代表する人々の間に於て、苟くも英語を学び、文学を味はうとする諸君に対し、僭越ながら敢て、一個の攻学的燈明たり、饗宴的燭光たらんことを期して居るのであります。そして又、本誌が『英語文学』と称せられると共に、THE LAMP のタイトルを有する所以も此処にあるのであります。切に、高級読書家諸君の御愛読を希望いたします」(第一巻第一号、一九一八年一月)

第四巻第二号「訳詩論」生田春月、一九二〇年二月

第四巻第二号「外国小説の翻訳に就いて」三上於菟吉、一九二〇年二月

第四巻第三号「藝術家としての翻訳家」生田長江、一九二〇年三月

第四巻第四号「翻訳に就いて」堺利彦、一九二〇年四月

『英文学研究』日本英文学会、一九一九年～

東京帝国大学英文学会(一九二九年より日本英文学会)が一九一七年に発足し、その学会誌として一九一九年号が創刊された(実際の出版は翌年二月)。関東大震災で一時的に中断したが、現在まで刊行が続いている(和文号、English Number)。

第三号「翻訳可能の標準について」野上豊一郎、一九二二年二月

第六巻第一号「翻訳は骨折損にあらず」舟生平蔵、一九二六年四月

第十一巻第二号「枕草紙の英訳」南極星、一九三一年四月

第十二巻第一号「明治時代に於ける英詩翻訳史概説(海潮音以前)」大和資雄、一九三二年一月

第十二巻第一号「翻訳と能」野上豊一郎、一九三二年一月

第十二巻第一号「抒情訳詩集」安齋七之介、一九三二年一月

第十二巻第一号「英訳俳句」加藤猛夫、一九三二年一月

第十四巻第四号“On Translating Japanese Poetry into English” Minoru Toyoda (豊田実)、一九三四年十一月

第十四巻第四号“English Translation of the Manyōshū” Tetsuzo Okada (岡田哲蔵)、一九三四年十一月

第十五巻第一号「英文『能楽』を読む」(野上豊一郎“Japanese Noh Plays: How to see them”書評) 幣原道太郎、一九三五年一月

第十五巻第一号「国訳英文学古典の普及版」Y. Y.、一九三五年一月

第十六巻第一号「シェイクスピアの註釈と翻訳」林満、一九三六年二月

- 第十六卷第三号「翻訳の問題」一九三六年七月
第十八卷第一号「原語と訳語と」新村出、一九三八年二月
第十八卷第二号「黎明期に於ける英文和訳」岩崎克己、一九三八年五月
第十八卷第二号「翻訳と現代語」（野上豊一郎『翻訳論』書評）織田正信、一九三八年五月
第十九卷第四号“On the New English Version of the ‘Manyōshū’” Sanki Ichikawa（市河三喜）、一九三九年十一月
第二十卷第一号「抽象名詞の具体的意義」乾亮一、一九四〇年二月
第二十一卷第一号「翻訳・訳註・教科書」織田正信、一九四一年三月
第二十一卷第三号「シェイクスピアの新訳」中西信太郎、一九四一年十二月
第二十二卷第二号「邦訳英語史」乾亮一、一九四二年十月
第二十二卷第四号「中世英文学の翻訳」上野景福、一九四三年四月
第二十三卷第四号『基本英語訳新約聖書』土居光知、一九四四年六月
第五十二卷第一、二合併号「E. Nida 他（著）、沢登春仁、升川潔（訳）『翻訳—理論と実際』（書評）下村誠二、一九七五年十二月

『外来語研究』平野書店、一九三二年—一九三八年

外来語研究会編で一九三二（昭和七）年十月に季刊誌として創刊され、三八（昭和十三）年一月まで続いた。市河三喜・岡倉由三郎・新村出を顧問、榎垣実を編輯兼発行人として京都の平野書店から発行。一九三〇年代という時代の「国語研究」における「外来語」への問題意識が本誌「創刊の趣意」に顕著であるので、以下に抜粋する。

「国語はその国の文化の表象であると謂はれてゐる。従つて国家が他国と交渉を持ち、外国文化を移植する事によつて、自国の文化を進展せしめるにつれて、国語中には必然的に外来語が輸入され、国語は甚しく外来語の影響を受くるにいたる。かくて古来外来語を持たぬ国語はなかつたのであるが、我国語の如きは古くより外来語のみならず外来字の影響をも多分に受けて、遂に今日の複雑な状態にまで発展し来つた。しかも此の傾向は一層激化しつつあつて、我々はその恩恵を受けると同時に、不利益をも蒙らねばならない。かくして外来語や外来字の我国語に与えた恩恵は、已に已に堪え難い重荷となつてゐる。特に外来字たる漢字が如何に我々を苦しめてゐるかは、漢字制限又は全廃論、ローマ語運動、カナモジ運動等の盛な唱道にみても明かである。国民として自国語の健全なる発達を助長すべき義務を持つてゐる我々は此の時に際して、国語の将来に対する遠大な方策を確立すべき急務を感じる。而してその目的の為には、国語の過去及び現在の諸相を究めると共に、外来語の徹底的な研究を企てねばならない。（以下略）」（創刊号、三頁、一九三二年十月）

- 創刊号「（雑俎）明治中期英語直訳体の実例」一九三二年十月
第二輯「英語の影響による日本語の文法的変化」齊藤静、一九三三年三月
第三輯「和漢混淆文と和洋混淆文」荒川惣兵衛、一九三三年七月
第三卷第二輯「翻訳語の敗退（1）」荒川惣兵衛、一九三五年十月

第四卷第一輯「翻訳語の敗退（2）」荒川惣兵衛、一九三六年六月

第四卷第二輯「翻訳語の敗退（3）」荒川惣兵衛、一九三八年一月

第四卷第二輯「明治以前に於ける外来語の音訳」矢口茂雄、一九三八年一月

『ENGLISH』文化評論社、一九四八年—一九五〇年

第六号「翻訳について」近藤いね子、一九四九年十一月

『英文法研究』研究社、一九五七年—一九六一年

一九五七年五月の創刊号には、「雑誌『英文法研究』は英語を学ぶ人、英語を教える人の文法的指針にしたいと思う。文法学者の研究発表機関でもなければ、初歩の文法解説雑誌でもない」とある。四年間継続した月刊誌。

第二卷第二号「翻訳ということ」高村勝治、一九五八年五月

第二卷第二号「明治維新前後の外来語と日本社会」村上一郎、一九五八年五月

第二卷第四号「『翻訳ということ』について」野崎孝、一九五八年七月

第二卷第六号「翻訳論（I）シェークスピア」三神勲、一九五八年九月

第二卷第六号「誤訳集」大塚高信、一九五八年九月

第二卷第七号「翻訳論（II）シェークスピア」三神勲、一九五八年十月

第二卷第八号「翻訳論（III）シェークスピア」三神勲、一九五八年十一月

第二卷第九号「詩の翻訳について」安藤一郎、一九五八年十二月

第三卷第十号「吉武好孝著『明治・大正の翻訳史』（書評）大野一郎、一九六〇年二月

第四卷第一号「和文英訳ノオト（1）〈伊藤整「ふるさと」〉」河野一郎、一九六〇年四月

第四卷第二号「和文英訳ノオト（2）〈木下順二「夕鶴」〉」河野一郎、一九六〇年五月

第四卷第三号「和文英訳ノオト（3）〈近藤東「田園」〉」河野一郎、一九六〇年六月

第四卷第四号「和文英訳ノオト（4）〈井伏鱒二「乗合自動車」〉」河野一郎、一九六〇年七月

第四卷第五号「和文英訳ノオト（5）〈東は東 西は西〉」河野一郎、一九六〇年八月

第四卷第六号「和文英訳ノオト（6）〈啄木「はてしなき議論の後」「拳」〉」河野一郎、一九六〇年九月

第四卷第十号「翻訳追放論」榎垣実、一九六一年一月

『文体論研究』日本文体論学会、一九六二年～

日本文体論協会が一九六一年に設立され、一九八九年に日本文体論学会と改称された。『文体論研究』は一九六二年十一月に創刊。二〇〇五年には特別号として『文体論研究書誌—日本文体論学会創立四〇周年記念』を刊行している。

第十二号「「デゴザル」体から「である」体へ」山本正秀、一九六八年六月

- 第十七号「“Hymnisch”に至る若きゲオルゲの Formwille と Stilwille—ボードレール翻訳のスタイル」
林秀之、一九七一年八月
- 第十九号「漢詩の英訳をめぐる（講演要旨）」御輿員三、一九七二年十一月
- 第二十一号「明治の文体革命」山本正秀、一九七四年十二月
- 第二十二号「明治初期における翻訳と文体—シンポジウム「翻訳の文章と文体」序にかえて」松村昌家、
一九七六年三月
- 第二十二号「『鳥留好語』の文章と文体」大井浩二、一九七六年三月
- 第二十二号「シェイクスピアの翻訳—坪内逍遙の場合」藤田実、一九七六年三月
- 第二十二号「聖書翻訳の文体（明治訳について）」佐藤全弘、一九七六年三月
- 第三十一号「日本語の表現法とその英訳の分析」古岩井嘉蓉子、一九八四年十一月
- 第三十三号「谷崎潤一郎『細雪』の仏訳について」長谷川泰司、一九八六年十一月
- 第三十三号「英訳聖書にみられる diakonos, diakoneō と doulos, douleuō の訳語について」、水谷顯一、
一九八六年十一月
- 第三十五号「日本文学の仏訳文体—英訳との比較文体論の試み」滑川明彦、一九八八年十一月
- 第三十六号「ヨハネ福音書一章五節にみられる “ou katelaben” の和訳の問題点について」水谷顯一、
一九九〇年三月
- 第四十号「翻訳と文体」（記念講演）齋藤襄治、一九九四年三月
- 第四十号「新約聖書にみられる “en kuriō” の訳語について」水谷顯一、一九九四年三月
- 第四十六号「伝達動詞の日独対照の試み」西嶋義憲、二〇〇〇年三月
- 第四十七号「明治初期讃美歌の成立とその流れ」茂洋、二〇〇一年三月
- 第五十一号「聖書に見られる動物名称の訳語について」水谷顯一、二〇〇五年三月
- 特別号「新しい文体論の構想」磯谷孝、二〇〇五年
- 特別号「文脈と文脈論」蘆田孝昭、二〇〇五年
- 第五十三号「もう一つの詩的效果」新井恭子、二〇〇七年三月

『英学史研究』日本英学史学会、一九六九年～

一九六四年六月に発足した日本英学史研究会が、一九七〇年十月から日本英学史学会となる。『英学史研究』は一九六九年に創刊され、狭義の英語・英文学にとどまらず、外交史、西洋文学・思想受容史、英語教授法史、近代科学史、英語関係書・辞書史など広範なテーマを扱っている。

- 第一号「訳語「彼女」の出現と漱石の文体」井田好治、一九六九年十二月
- 第三号「島崎藤村の翻案作品」吉武好孝、一九七一年六月
- 第八号「明治期におけるD・G ロセッティの紹介」佐々木満子、一九七五年九月
- 第十二号「黒岩涙香と萬朝報」佐藤林平、一九七九年九月
- 第二十一号「オランダ通詞名村氏—常之助と五八郎を中心に」石原千里、一九八八年十月
- 第二十一号「マクドナルドの日英語彙集改訂」園田健二、一九八八年十月

- 第二十一号「チェンバレンの英訳浦島」高梨健吉、一九八八年十月
第二十一号「七曜の訳語考」遠藤智比古、一九八八年十月
第二十二号「カバ」の訳語考」遠藤智比古、一九八九年十月
第二十四号「Dickins の英訳『百人一首』」川村ハツエ、一九九一年十月
第二十五号「坪内逍遙によるシェイクスピア浄瑠璃訳の研究（その1）」佐藤勇夫、一九九二年十月
第二十六号「坪内逍遙によるシェイクスピア浄瑠璃訳の研究（その2）」佐藤勇夫、一九九三年十月
第二十六号「国民文庫刊行会の三つの翻訳叢書について」田村道美、一九九三年十月
第二十六号「明治初期におけるミルの翻訳2種—『男女同権論』と『弥児教育論』」山下重一、一九九三年十月
第二十六号「官定英訳教育勅語における翻訳の思想」平田諭治、一九九三年十月
第二十六号「哲学」の訳語考」遠藤智夫、一九九三年十月

『時事英語学研究』日本時事英語学会、一九六二年～

一九五九年に設立された日本時事英語学会が発行する学会誌。英語教育と時事英語教材をテーマとした論文、認知言語学や批判的談話分析などを理論的枠組みとする論文などを掲載している。

- 第二号「翻訳の理論と実際」天羽徳之助、一九六三年九月
第六号「日本文学英訳における日英語の比較」宮川喜代江、一九六七年六月
第十一号「ニュース翻訳の一考察」藤井章雄、一九七二年九月
第十一号「性格描写の英訳について—『雪国』の「駒子」の場合」宮川喜代江、一九七二年九月
第十二号「英訳における人物描写—『春琴抄』の春琴」宮川喜代江、一九七三年十月
第十三号「時事英語の Application としての日米翻訳」林田満寿夫、一九七四年十月
第十八号「天声人語」英訳の研究」塚晴夫、一九七九年九月
第十九号「法律用語の英訳」内崎以佐美、一九八〇年九月
第二十二号「新語の英訳—理論と実際」石山宏一、一九八三年九月
第二十四号「逐次通訳へのアプローチ—日本語訳出における比較研究」久米昭元、一九八五年九月
第二十七号「同時通訳法による英作文演習の試み」久米昭元、一九八八年九月
第三十二号「時事英語教育の一環としての会議通訳訓練」鳥飼玖美子、一九九三年九月
第三十三号「同時通訳に現れる「認知ファイル」」船山仲他、一九九四年九月

『英語表現研究』日本英語表現学会、吾妻書房、一九八四年～

一九八二年十一月に英語表現研究会総会が開催され、翌八三年に英語表現学会と改称。本誌の創刊は一九八四年十一月である。

- 第六号「日本文化に関する語句の英訳法について—ラフカディオ・ハーンの訳出法を中心に」坂東浩司、

翻訳関連文献の集成について

一九八九年六月

第六号「翻訳論」埋橋勇三、一九八九年六月

第十号「川端康成〈掌の小説〉の英訳をめぐって—比喩を中心に」大嶋真紀、一九九三年十月

第十一号「漱石の尻取り文の翻訳について—意味的結束性」鈴木雅光、一九九四年六月

第十五号「*Julius Caesar* の翻訳—坪内逍遙『自由太刀餘波鋭鋒』を中心に」福島昇、一九九八年六月

以上